未定

苺タルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未定

【Ｎコード】
Ｎ１４４０Ｆ

【作者名】
苺タルト

【あらすじ】
こんな近い恋愛があってもいいかなぁ？って思って書いてみました。全て架空・妄想・自己満であります。

第1話

…眩しい…ここは…どこ？

向こうには原っぱ…懐かしい匂い。

「…すねぇ！」

誰かの声がする。
とても懐かしい声…誰？
声のする方に走っても走ってもそこに行けない。
でも、声だけは段々大きくなっている。

「…すか！ぁすか！」

あれ？この声…。

「明日香っ！」

母の怒鳴り声でこの家の一人娘、松下　明日香（２２歳）は飛び起きた。

「うわっ、びっくりしたぁ。眩しい…。」

母親が明日香を起こすのにカーテンを開けていた。

１２月３１日

今年は暖冬だといわれているが、朝は底冷え。
布団から出るのに必死だ。

「まったく、いつまで寝てるのよ。今日は忙しいんだから早起きして手伝ってって、頼んであったでしょ！」

母は凄い剣幕である。

「ごめん、すぐ下に行くから。」
「ほんとにもぅ。」

と言いながら、母は部屋を出て行った。

「はぁ・・・サブっ。」

またあの夢だった。
小学生の頃からたまに見る夢。
いつも眩しいシーンから始まって、聞き覚えのある声が聞こえる。

「ん～～～～～～！よしっ！」

明日香は意を決して布団から出て、洗面所に駆け込んで顔を洗った。
メガネだけかけて寝巻きのスウェットにカーディガンを羽織って下におりていった。

すでに母は今夜の宴に出す料理の下ごしらえなどをしていた。
半端ない人数が集まる大晦日、食材や調味料は業務用スーパーまで買いに行かされた。

「お父さんを手伝って。」

母に言われ玄関に行くと、父は届いた貸し布団を客間に運んでいた。
これも半端じゃない量。

「おはよ、パパ。手伝うよ。」

明日香は布団運びを手伝い始めた。

「おはよ、ねぼすけさん。」

父は笑いながら布団を運んでいる。
今日は親戚が午前中から午後にかけて続々とやってくる。
松下家では、毎年大晦日にみんな集まって新年を迎える。
だいたい2日くらいまでゆっくりしていくのだ。
この家を、父が祖父から受け継いだおかげで、我が家は毎年準備が大変なのである。

大量の布団運びの後は、昼食を食べて買出し。

さすがに寝巻きじゃね・・・

明日香は部屋に戻り着替え、メガネからコンタクトに替えた。

唯一、車の運転ができるのは明日香だけ。
母がリストを書いてる間に、支度をした。

眉毛くらいかかなきゃ。

眉ペンで眉毛を書き足していると、“ピンポーン♪”と、鳴った。
もう誰か到着したらしい。
明日香は上着を持って下におりていった。
階段の角のところで、出会いがしらで誰かとぶつかった。
突然現れた誰かは、倒れそうになった明日香を抱き留めた。

「ごめん！大丈夫？」
「うん、大丈夫。」
「明日姉だ！」

明日香は相手の顔をみた。
従兄弟の啓輔だった。

「啓輔！久しぶり。」
「久しぶり！」

１０年ぶりに見る啓輔は、背も高く、ずいぶん大人になっていた。

「どっかいくの？」

啓輔は、明日香の格好を見て聞いた。

「うん。買い出しにね。」
「俺も行っていい？荷物多かったら男手必要だろ。」
「うん、助かる。」

明日香は台所に行き、母からお金とリストを受け取りガレージに向かった。

「なんか、不思議。」

啓輔は言った。

「何が？」

明日香はシートベルトをしながら聞いた。

「明日姉が運転するなんて。」

「そぉ？」

「俺の中で明日姉は１０年前で止まってるから。」

そっか。

あたしはＴＶでみてるけど、啓輔にとっては１０年前のままなんだ。

啓輔。

１０年前、隣の家から都内に引っ越して以来の再会。

今や人気の新人俳優である。

子役から下積み時代を経て、今年、来年公開の初主演映画が決まった。

車で走ること１０分。

地元で一番大きいスーパーに着いた。

年末ってこともあり、駐車場に入れるのに２０分もかかってしまっ

た。
しかし、大変なのはこれから。
店内は人・人・人。
まず、2階の生活雑貨売り場から行った。
これからやって来るちびっ子たちに渡すお年玉の袋と、退屈しないようにカルタやゲームを用意した。

「優しいおばちゃんじゃん。」

啓輔が言うと、「なんか言った？」と、明日香が睨んだ。

「なんでもないです」

啓輔は笑ってごまかした。

「啓輔は必要なもんないの？」
「俺も、お年玉んじょ袋くらいかな。強いて言えば…。」
「何？」

啓輔は、カートを押して明日香より前に出て覗き込み、

「明日姉が欲しい。」

と、言った。

「はぁ？何言ってんの？」

明日香が眉をしかめて言うと、

「なんでもねぇよ。」

と、笑って言った。

「変な奴。」

結局、全ての買い物がすむまで1時間もかかってしまった。

仕方なく明日香は、家に連絡を入れて、そのまま祖父母を迎えに行くことにした。
祖父母の家は、全室バリアフリーの高級マンション。
父に引き継いだ家を出て、老後は家政婦さんに身の回りの世話をしてもらって優雅に暮らしている。

車を入り口に停め、家政婦さんに迎えにきたことをインターホンで伝え、祖父母を家までお迎えに上がる。
啓輔がいてくれたおかげで車をエントランス前に停めて見張っててもらえた。

「おばぁちゃま、おじぃちゃま、こんにちは。お加減いかがですか？」
「いつもすみませんねぇ。」
「今日はサプライズなゲストが来てるわよ。」

祖母は、家政婦さんから明日香に引き継がれエレベーターに向かう。
祖父はは家政婦さんに付き添ってもらった。
エントランスを出ると啓輔が大きく手を振った。

「じぃちゃん、ばさちゃん久しぶり！」
「啓輔か！立派になったなぁ。今年はきたのか。そうかそうか。」

１０年ぶりの孫との再会に嬉しそうな祖父母。
祖父母は毎年孫やひ孫に会えるこの日を楽しみにしている。

「今年も賑やかな年越しになりますかねぇ。」

祖母が言った。

「家に着く頃はみんな到着してきっと賑やかよ。」
「年に一度の楽しみなんだよ。」
「いつも来れなくてごめんな、じいちゃん。」

啓輔は申し訳なさそうに言った。

「こうやって会えたんだから、嬉しいよ。」

祖父はニコニコしている。
明日香はそれが長生きの秘訣になってるんだと思った。

家に到着し、母がパタパタと小走りで玄関にやってきた。

「いらっしゃい、明日香の運転で酔いませんでした？」

母は真顔で冗談を言う。

「だったら、あたしに頼まないでくれる？」

明日香はむくれて言った。

「全然酔いませんよ、ねぇ？おじいさん」

祖母はいつもこんなリズム。
明日香もたまにコケそうになる。

案の定、家は親戚の子ども達で賑やかになっていた。
祖父母の到着で、居間では楽しく談話が始まった。
松下家の女たちはキッチンで母の手伝いをしている。
明日香は部屋に戻り、お年玉の準備をすることにした。
コーヒーメーカーの電源をｏｎにし、明日香のお気に入りのお店のコーヒーを落とす。

この香りがいいんだよね。

“トントン”

「はい？」
「俺。啓輔」
「入りなよ」

“ガチャ”っとドアが開き、啓輔がひょこっと顔を出した。

「大人の話しにはついていけないよ。下にいてもつまんなくてさ。」
「啓輔だって大人じゃない。」
「子供の相手をすんにも少し体力が。」
「いいじゃない、子供なんだから。」
「どっちなんだよ。」

啓輔はむくれた。

「冗談。コーヒー飲む？」
「うん。すげぇいい香り」
どうやら、啓輔もコーヒーの香りに癒されるようだ。
「わたしのお気に入りのブレンドなの。ミルクと砂糖は？」
「明日姉と同じでいいよ」
と、言って後に後悔することになる。
「・・・明日姉、ブラックなんだ？」
「うん。」
様子を察した明日香は、笑いながら砂糖とミルクを出した。
「ありがと。大人だなぁ、やっぱり」
啓輔は苦笑いで言った。
「そぉ？コーヒーで判断するもんじゃないわよ。」
と言って、コーヒーを飲んだ。

明日香の部屋は、１０畳の広いフローリングにピンクが基調の女の子らしぃ部屋。
コーヒーメーカーや、専用冷蔵庫もある。
ラグマットが敷かれたとこにソファと硝子テーブルがあり、そこで二人はお年玉の準備を始めた。

「年に一度の大出費（笑）」
「そっか明日姉は毎年だ。」
「うん。」

啓輔は、部屋を見渡した。
ふと、本棚が目に入った。
たくさんの本がならんでいる。

明日姉は、昔から絵本とか好きだった。

「明日姉、本がたくさんあるね。」
「うん。好きだからね。たまに作家みたいなことやってんだょ。」
「マジ？今度見せてよ。」
「気が向いたらね（笑）」

と、明日香は笑って言った。

作り終えると、明日香は棚からお菓子を取り出しテーブルに広げた。

「あたし、昼寝するからくつろいでて。冷蔵庫にコーラとかもあるし。」

明日香はそう言うと、ベッドに入ってしまった。

マジかょ…。

仕方なく啓輔は本棚から漫画を持ってきて、お菓子をつまみながら読み始めた。
しばらくすると、明日香の寝息が聞こえ寝てしまったことがわかった。

啓輔はチラっと明日香をみた。
気持ちよさそうに寝ている。

啓輔は、幼い頃から明日香に想いを寄せていた。
啓輔が小学校に上がったばかりの時、慣れない環境についていけず泣いてばかりだった。
ある日、母親が仕事で遅くなるといって明日香の家で預かってもらうことになっていた日、班長会議に出ている明日香を一人下駄箱で待っていた。
とっくに下校時刻は過ぎている。
なかなか明日香はやってこなかった。
段々暗くなってくる校舎に啓輔は不安でいっぱいだった。
急におしっこに行きたくなった啓輔はトイレに行こうと立ち上がった。
外は夕日でまだ明るかったが、振り向くと、暗くなってきているシーンとした広い校舎は小さい啓輔にとって不気味にさえ感じた。

明日姉が来てからにしよう・・・

だが、なかなか明日香は来なかった。
足をばたつかせながら、いよいよ限界に達したとき勇気を振り絞ってトイレに向かって走り出した。
しかし、1年生の啓輔にはトイレは遠かった。
とうとう開放してしまったとき、たまたま通りかかった上級生にそれを見られてしまった。
大笑いされて泣くしかなかった啓輔も前にいつの間にか明日香が立っていた。

「あんたたち、困っている小さい下級生を笑うなんてサイテーね。

あたしの大事な従兄弟を今度またいじめたらただじゃすまないよ。」

こんなんで明日香は当時小学校三年生。

「啓輔、大丈夫？遅くなってごめんね。こんなこと恥ずかしくなんかないからね、今用務員のおじちゃん呼んでくるから、掃除したら一緒に帰ろう。」

そう言って、明日香は用務員さんを呼びに行って、掃除が済むと一緒に謝って、啓輔の手を引いて帰った。

これが啓輔の初恋になる。

それ以来、明日香は“スケ番明日香”と呼ばれるようになり、男子から恐れられるようになった。

ある日、アニメでいうジャイアンみたいな奴に、明日香がいじめられたことがあった。

「お前らできてんだろ？」明日香が啓輔と一緒にいるのをバカにしてきたのだ。

口喧嘩から始まり取っ組み合いにまでなって、ジャイアンの気が済んで帰る頃には、明日香は傷だらけになっていた。

オレ・・・なんにもできなかった。

明日姉を助けてあげられなかった・・・・

あんなデカいやつに立ち向かってまで自分を守ろうとした明日香をいつか必ず守ってやるんだと心に誓った。

それから啓輔は、嫌いなピーマンを克服したし、牛乳もたくさん飲

んだ。
空手も習った。
ただ強くなりたくて。

啓輔は幼稚園の頃から、母親のエゴで子役の劇団に入っていた。
母親の夢はジャニーズ。
しかし、啓輔は演劇に興味を持った。
その思いがあってか、ちょくちょく脇でドラマやＣＭに出るようになった。
地道な努力の甲斐あって、１０歳の啓輔に映画の話しが来たのだ。
その撮影は、都内を中心に行われ、地方でもある。
学園もののミステリードラマの映画化。
その出演が決まったのだ。
そのために、家族もろもろ東京へ引越しすることになった。
映画初出演で嬉しい反面、明日香との別れはツラかった。
そこで思いついたのがプロポーズだった。

別れの日、ホームで１０才の啓輔は明日香にプロポーズをした。
「オレが一人前の俳優になったら、結婚して下さい！」
明日香はにっこり笑って
「うん。頑張ってね！」
と、手を振った。
その出演がきっかけに今や若手ナンバー1俳優。

明日姉は、あのときの返事を覚えているだろうか…
いくら年の差２つとはいえ、１２才の明日香はもう年頃だ。
自分のためにわざと言ったのかもしれない。

何も知らない明日香はグウグウ寝ている。
思わずため息をついてしまった。
啓輔は、明日香の顔に近いた。
綺麗になったよ。ホントに。
階段でぶつかって倒れそうになった明日香を抱き留めたとき、大人になった明日香を見て一目惚れした。
惚れ直したが正しいだろう。
明日香が自分の腕にすっぽり収まってしまった。
守ってやれる！
啓輔の手が自然に明日香の顔を触ろうとしている。
すると、
「何？」
突然明日香が目を開けた。
大きな瞳がこっちを見ている。
「うわぁ！」
思わず後ろに倒れてしまった。

「うわぁ！じゃないょ。」

目をこすりながら起きた。

「気持ちよく寝てるなって思って。」

啓輔はごまかした。

「だったら啓輔も寝ればいいじゃん。」

「え、隣？」

「え？」

明日香は少し考えて、

「あぁ、そっか。布団ないもんね。いいよ。」

と言って、半分空けた。

「え？いやっ、」

半分空けると、そのままそっぽ向いて寝てしまった。

「お邪魔します。」

啓輔はドキドキしながらそーっと布団に入った。

布団は明日香の温もりで暖かくなっていた。

緊張して寝れるかよ…

啓輔は思ったが、なんだか懐かしいような気がして、気付いたら寝てしまっていた。

第2話

明日香の母が二人を呼びに部屋に入ると、気持ちよさそうに寝ていた。
寄り添うように、まるで子供のころを見るようだった。

「あらあら（笑）」

母は笑いながら二人を起こしたのだった。

寝ぼけた顔で二人して下りていくと、豪華なご馳走が並んでいた。

「わぁぉ！おいしそう♪」

二人が席につくと、祖父の挨拶で乾杯し、大晦日の宴が始まった。

もっぱら、久々に来た啓輔の話しで盛り上がる。
ドラマの裏話しや、今度主演が決まった映画の話し。
親戚中が興味深々に耳を傾ける。

“ピンポーン”

出前の年越しそばが届いた。
えびの天ぷらが乗ったおそば。

「エビぃ～♪」

明日香は一口で頬張ると、
「さいほー！（サイコー！）」
と言った。
「ところで、明日香ちゃんはいい人みつかったかな？」
啓輔の父が言った。
「ぶっ」
明日香と啓輔は同時に吹き出した。
「なんだ？二人して。」
啓輔の父は首をかしげた。
「おじちゃん、毎年ながら急だねぇ。」
明日香はばらまいた蕎麦を拾った。
「そろそろ結婚したっていい歳だろ。」
ガハハハハと笑う啓輔の父。
「いい歳って…」
「親父、毎年そんなこと言ってんのかょ…。」
啓輔も呆れ顔。

「お父さん以上に心配してるのさ。一人娘だからな。嫁に出したくないんだょ。」
ビールを飲みながら言った。
「まだ早い。」
明日香の父は言った。
「ほら、あのお隣りの彼は？」
啓輔の父は、明日香の父をシカトして続けた。
啓輔の箸が止まった。
お隣りの彼…。
「幼なじみですから。」
明日香は言った。

明日香が食べ終えてお風呂に行っている間、啓輔は“お隣りの彼”について聞いてみた。
「啓輔達が越してってすぐ買い手がみつかっただろ。その息子が明日香と同い年で、明日香が友達になって世話役やってたんだよ。」
「あの二人は付き合ったわけじゃないんだよな？」

と、明日香の父が母に聞いた。

「明日香は好きだったみたいですけど、一度はフラれたのよ。」

明日香の母が言った。

一度は…？

「お隣りの彼って大地くんって言うんだけど、高校生になって今度は大地君がフラれたのよ。明日香に付き合ってた人がいて。直接明日香に告白したわけじゃないから、未だに明日香は大地君の気持ち知らないんじゃないかしら？」

しかしよく知ってるな、おばちゃん。

「そのあとは仲良くはやってるみたいだけど、どうなのかしらね？」

明日香の母も気になるところらしぃ。

「今はお互いに相手がいないなら、両思いだろ？付き合っちゃぇばいいのに。」

啓輔の父が言った。

そうか…明日姉の好きだったヤツが隣に住んでるんだ。

すると、お風呂から上がった明日香が帰ってきた。

「明日香ちゃん、お隣りの彼のこと今はもう好きじゃないの？」

啓輔の父は酔っ払うと女みたいになる。
「嫌いじゃないですよ。いつも一緒にいるから。」
と言って、明日香はビールを一口飲んだ。
いつも一緒に？
「バイト先同じですものね。」
明日香の母が言った。
「あぁ、じれったい二人だなぁ。」
啓輔の父はとうとう壊れだしたようだ。
「親父（怒）」
啓輔は呆れてしまった。
「おじちゃん大丈夫？」
明日香は笑っていた。
人の気も知らないで。
そうこうしているうちに年が明けた。
啓輔は明日香にグラスを向けて
「おめでとう。」

「おめでと。」

改めて乾杯をした。

それから二時間も飲んでいると、さすがに明日香も眠くなってきた。

「あたしもぅ、れる…」

立ち上がり、フラフラ居間を出ていった。

啓輔は後を追い、明日香の腕を肩にかけた。

「大丈夫かょ。」

「じぇんじぇんらいじょうぶ。」

「大丈夫そうじゃねぇな。」

啓輔は明日香の部屋に入り、明日香をベッドに寝かせた。

「けぇすけありがろ」

そう言って明日香は寝てしまった。

「まるで酔っ払いの親父だな。」

啓輔は布団をかけてやって部屋を出た。

翌朝　1月1日

目が覚めると、自分の部屋の天井が見えた。
あれっ？なんで部屋にいるんだっけ？
明日香は体を起こすと猛烈な二日酔いで目が回り出した。
今何時ょ…１０時。
下はもぅちびっ子たちが暴れ回っているようだ。
重たい体をベッドから出して、エアコンを入れて、お決まりのコーヒーをセットして、下におりていった。
下におりていくと、母がすでにキッチンに立っていた。
「おはよ…」
明日香は冷蔵庫を開け、二日酔いに抜群に効く液キャベを取り出した。
「あら、珍しく早いじゃない。」
母は、朝ご飯を作っていた。
「みんなは？」
「啓輔くんはまだ起きてきてないけど、お父さん達はもぅ始めてるわよ。」
居間を覗くと、父ゃ啓輔の父はすでに飲み始めていた。
「じじぃのくせに、タフだね。」

液キャベを一気に飲んだ。

「おはょ」

啓輔がキッチンにやってきた。

「おはよ。」

「明日姉、顔ひどっ」

明日香の顔を見て言った。

二日酔いで顔がひどいことになっているらしぃ。

「失礼ね。」

「明日香はいつもこんなんですよ!」

母が笑って言った。

「シャワーでも浴びてサッパリしてらっしゃい。」

母は言いながら、お茶碗に山ができるほどご飯を盛った。

誰が食べるんだ…?

「そうする。コーヒーおとしたけどくる?うっぷ…だぁーゲップが液キャベの味するぅ（涙）」

明日香は部屋に向かった。

啓輔は遠慮なくコーヒーをいただくことにした。

明日香は啓輔にコーヒーを入れてやり、

「すぐ戻るから。」

と言って、タオルを持って風呂場に行った。
ほんの5分で明日香は戻ってきた。

「ホントに早いな。」
「うん、カラスの行水だもん（笑）」

明日香は笑って答えた。

「今日は何してる？」

啓輔は砂糖と牛乳をたっぷり入れたカフェオーレを飲みながら言った。

「特にないなぁ。」
「神社に初詣行かない？」
「いいね！行こうよ。」

明日香たちは、朝ご飯を食べた後、地元の神社に向かった。
出店が出ていてお参りする人や出店の食べ物を買いにくる人で賑わっている。
お参りするのに一時間以上も列んでしまった。

「何お願いしたの？」

啓輔が聞いた。

「言っちゃったら叶わなくなるかもしれないじゃない。」

明日香は言った。
すごい人混みを神社の入口に向かって歩いた。
明日香は、気付いたら啓輔とはぐれていた。

「啓輔」

どこを見ても人だらけ。
入口で待つことにして、鳥居へ向かった。
人を掻き分け前に進むが全然進まない。

「明日姉！」

後ろから手を掴まれた。

「啓輔！よかったぁ、いなくなっちゃったかと思った。」
「こっちのセリフ。勝手にいなくなるなよ。」
「ちょっと待ってよ、あたしが悪いの？」
「オレは真っ直ぐ歩いてたもん。明日姉は？」
「…イカ焼き見てた。」
「ほぉらぁ（笑）イカ焼きって。」

啓輔は笑い出した。

「何よ。」
「似合いそうだなって思って。」

ゲラゲラ笑い出す啓輔。
明日香はむくれて、

「知らない。」

と言って歩き出した。

「明日姉！ごめん。またはぐれちゃうょ。」

明日香の手を握った。

「はぐれたっていいわよ。一人で勝手に帰るから。」

「スネるなょ（笑）」

「スネてない！」

「ごめんって。」

「もぅ、バカにして。」

むくれながらも、無事入口に到着した。

鳥居を出ても手を離そうとしない啓輔。

「ねぇ、もう迷子にはならないけど。」

明日香が言うと、

「いいじゃん、このままで。寒いし。」

と言って、啓輔は握る手を強くした。

大きくて温かい手に、明日香は不思議な胸の感覚を覚えた。

段々鼓動が速くなっていく。

なんだ？この感じ。

疑問に思いながら、それも手を離すことないまま家に帰った。

帰ると、母がお雑煮を作って待っていた。
二人は居間でお雑煮を食べ始めた。
もぅ、おじちゃんと父はできあがって寝てしまっていた。

「親父たち飲み過ぎ。」

啓輔は呆れて言った。

「毎年そうだょ。」

明日香は汁をすすった。

“ピンポーン”

チャイムが鳴った。
母がパタパタと玄関に向かう。

「あら〜！おめでとう。明日香なら居間にいますよ。」

母が来客に言っている。

「明日姉に客みたいだな。」
「うん。」

構わず食べ続けた。
客人が誰だかわかっていたからだ。

「よぉ！あけおめ。」

居間に入ってきた客人は身長が１８０センチもある巨人。
隣に住む噂の彼、“大地”

「おめでと。私に用？それともママのお雑煮食べにきたの？」
「両方（笑）親戚？」

聞いてもいないのに察しがついた母が、大地のお雑煮を持ってきた。

「おぉ！おばちゃんありがと。いたたぎます！」

大地は機嫌よく食べ始めた。

「従兄弟の啓輔。」

啓輔と大地は互いに会釈した。

「そんで、私に用って？」
「ふん、ひーふぃひーかひにひた。」
「あぁ、ＤＶＤね。サブデカの映画でしょ？」

すげ・・・俺にはわからなかったぞ。

啓輔は関心した。

「ほぉ！」

餅を頬張り飲み込むと、

「ダカとヨウジが久々にみたい。」

と、言った。

「おもしろいよね。啓輔、蒲鉾あげる。」

明日香は、啓輔のお椀に蒲鉾を入れた。

「じゃ、人参食べて。」

啓輔は人参を明日香のお椀に入れた。
すると、たまたま居間に来た母が

「１０年経っても、相変わらずね。」

笑いながら言った。

「なにが？」
「小さい頃、この子たちいつも嫌いなもの交換してたの。啓輔くんは１０年ぶりにきたんだけど、あの時のままおっきくしたみたぃ。昨日二人が昼寝してたときも懐かしく思っちゃった。」

嬉しそうに話す母。

「ふーん。」
「啓輔見て何も言わないあたり、相変わらずテレビ見てないわね？」
「ん？」
「言わなかった？従兄弟に芸能人がいるって。」
「言ってた。えっ？じゃぁ…あぁ！」

思い出したようだ。

「君があの『国の中心で愛を吠える』とか出てた俳優さんか！」
大地は目を輝かしている。
「はぃ。」
啓輔は控え目な感じで言った。
「ご馳走様。大地、部屋行くよ。啓輔も来る？」
「俺はいいよ、もう一杯食べるから。おばちゃん、おかわり！」
母にお椀を渡した。
「わかった。」
明日香と大地は部屋に行った。
あれが恋敵かぁ。
悔しいけど、長身でカッコいい。
「心配？」
明日香の母がお椀おいて言った。
「何が？」
汁をすすった。
「明日香と大地くん」

明日香の母が言うと、啓輔は汁を吹いてしまった。

「あちぃ～。」

明日香の母は笑いながらフキンを渡した。

「明日香は一度フラれてるからわからないけど、大地くんは明日香のこと今でも好きね。」

まるで啓輔の気持ちを見透かしたように明日香の母は言った。

「頑張んなさぃ！」

明日香の母は台所に行ってしまった。

おばちゃん…気付いてる？

第3話

「はい、これ。」

明日香はサブデカのＤＶＤを渡した。

「サンキュー。新年早々、暇でさぁ。」

「ご両親は？」

「二人で仲良くハワイ行ってる。」

「おいてかれたの？」

明日香は笑いながら言った。

「そぅ、おいてかれたの。笑うな。」

大地はむくれて言った。

「さっきは、なんか寂しかった。」

大地は続けた。

「何がょ？」

「従兄弟の話し。こんだけ一緒にいてまだ知らないことあったんだって。」

「あたしの全て知ってどぉすんのょ。」

明日香は笑った。

「いろいろとなぁ。腐れ縁だと思ってるから。」
「確かにね、行く高校もクラスもバイトも偶然一緒だし。」
「俺がサッカー部に入ればマネージャーとして入ってたし。」
大地は懐かしそうに言った。
「これからもこんな感じなのかね？うちら（笑）」
「俺は変えたいけど？」
「ん？」
「いい。じゃぁ、そろそろ帰るわ。」
大地は腰をあげた。
「夕飯も食べてけば？」
「いいよ、従兄弟もきてるんだし。」
いつもなら遠慮なく食べていく大地が、遠慮した！
「めずらし。」
「バイトの帰りでも、新年会しようぜ。」
「そうだね！じゃ、また。」
「おぅ。」
大地は母に「ご馳走様！」と言って帰っていった。
「あら、もぅ帰ったの？」
母が驚いて言った。
「うん、夕飯食べて行けばって誘ったけど食べてかないって。どー

したんだろ？」
「気を使ったのよ。啓輔くんがきてるから。」
「意味わかんないし。」
「一人で居間にいるわよ。小さい子の相手してる。」

そっか。
年が近い啓輔に気を使ってくれたんだ。
周りは小さい子ばかりだもんね。

明日香は居間に行った。
すると、楽しそうにちびっ子と遊ぶ啓輔がいた。
若干疲れているようだ。

「啓輔、なんだか楽しそうじゃない。」
「バカ、めっちゃキツいって！明日姉も参加しろよ。」
「よーし！交ざっちゃおうかなぁ～」

明日香は子供たちの輪に飛び込んだ。
しかし、１０分もしないうちにぜぇぜぇと息が上がっていた。

「平気かょ。」
啓輔は言った。
「平気じゃない…違うのやろう？カルタとか！」
明日香は言った。

新年の宴は今夜も行われた。

明日香も啓輔も軽く飲んで、部屋でＤＶＤを見ながら飲み直すことにした。

「何みたい？サブデカは貸しちゃったし。」

明日香がＤＶＤをあさりながら言った。

「宮崎遅男のはないの？癒されたい。」

「ビールにトロロ？…いいかも！魔女の宅配便もあるょ。あとソウルの動く家。」

「ソウルがぃぃ。」

明日香はソウルのＤＶＤを取り出し再生した。

魔法使いと魔法にかけられおばあちゃんになった普通の少女の恋のお話。

ビールを飲みながらまったりとした時間が流れた。

「いいね、こんな恋も。」

明日香が言った。

「だな。明日姉はしてないの？」

「してない。」

「俺はしてるよ。」

「へぇ！どんな！」

「ずっと想ってる人でさ、そんときの俺にはまだその人守ってやれるだけの力がなかったんだ。守ってやれるだけの男になったら必ず会いに行こうって決めていたんだ。」

「ステキな話しね。」

「だから今年会いに来た。」
啓輔は明日香を見た。
「素敵！いつ会いに行くの？」
明日香の目がらんらんしている。
「目の前にいる。」
「え？」
状況がまったくつかめていない明日香。
「俺の初恋の人は明日姉なんだ。」
少し間が開いた。
啓輔が何言ってるのか理解するのに時間がかかった。
「酔ってる？」
「少し。」
「じゃ、おふざけとして聞いておく。」
「ステキな話しだって言ったじゃねぇかょ。」
啓輔はむくれた。
「その相手がなんであたしなのよ。」
「明日姉なものは明日姉なんだよ。」
「うちら身内同士じゃない。」

「それが何んだよ？」

マジか・・・？

啓輔おかしくなっちゃった！

「この酔っ払い。」

明日香は啓輔のほっぺをつねった。

「痛てっ」

明日香の手首を掴み、押し倒した。

「ちょっとっ、啓輔！やめて！」

明日香は顔を真っ赤にして怒った。

「従兄弟だったら問題はないはずだぞ。だけど俺は、明日姉を女としか見たことない。」

啓輔は明日香を真っ直ぐみつめた。

「俺本気で言ってるよ。だから本気で聞いてよ。」

「啓輔。離して…」

「明日香っ！」

啓輔の声が大きくなると、明日香は涙目になった。

啓輔は掴んだ手を離した。

「ごめん。」

啓輔は言った。

起き上がった明日香は目に溜まった涙を拭った。

「俺は明日姉を好きになっちゃいけないの？好きになった女が従兄弟だっただけじゃないか。」

啓輔は肩を落として言った。

明日香は何も答えなかった。

鼓動が速くなっている。

おかしぃ。

初詣の時といい、なんなの？

「俺、もう寝るわ。」

啓輔は、残ったビールを持って部屋を出た。

明日香はソファーに座ったまま自分に芽生えている感情がなんなのか考えていた。

初恋があたし？

でも、なんか・・・思い出せそうで思い出せないことがあるような。

楽しい光景。

ここは原っぱだ。

誰かと追いかけっこしている。

あっ、転んだ。

「明日姉、大丈夫？」
誰かが手を差し延べている。
誰かさんの顔は？
誰かさんの手は大きくて温かい。
記憶にある感触…。
見上げると逆光でよく見えない誰かが微笑んでいる。
誰？
誰かの頭で差し込む光が消えると、啓輔がいた。
「明日姉！」

ぱっと目が覚めるとカーテンの隙間から光が差していた。
「朝…。」

1月2日。
掛けた覚えがない毛布がかかっていた。
ママかな。
てか！啓輔にどんな顔で会えばいいの？
夢にまでででてきちゃったよ。
広い部屋で明日香は独り言をブツブツ始めた。
“トントン”

ノックの音でいったりきたりしていた明日香の動きがピタッと止まった。

「はぃ。」

ドアが開き、啓輔が顔を出した。

「おはよ。朝飯だよ」

必死で悩んでいた明日香に比べ、何事もなかったようにいつも通りに話してくる啓輔。

「う、うん。」

「どしたの？横断歩道の信号みたいなポーズで。」

啓輔は笑って言った。

「えっとぉ～、寒いから歩き回ってたの。」

慌てて言ったものの、腹抱えて大笑いしている啓輔。

「笑いすぎ！」

明日香はむくれた。

「ねぇ、でかけない？」

啓輔が言った。

「どこに？」
「横浜あたり。買い物付き合ってよ。」
「かまわないけど。」
「じゃ、決まり♪」

啓輔は部屋を出て先に居間に行った。

なんであんなに普通でいられるの？
あたしなんかあたふたしちゃってんのに。

明日香は着替えて居間に行った。
ママ特製、明日香の大好物であるダシ巻き卵でご飯を食べた。

テレビでマルイのスパークリングセールを宣伝している。
もう、何年も年明けに買い物に行ってない明日香はちょっと楽しみになってきた。
二人は支度を済ませ、昼前に家をでた。
横浜は電車で３０分。

改札を出ると、福袋持った人でごった返していた。

「すごい人だねぇ。」

明日香はその人だかりを見ただけで疲れてしまった。

「オレも福袋欲しい！明日姉、ビブレ連れてって！」

啓輔は明日香の手を掴んで歩き出した。

「ちょっと啓輔っ」

啓輔はぐぃぐぃ引っ張って歩く。
啓輔との歩幅が合わない明日香は小走り状態。

「ねぇ、そんなぐぃぐぃ引っ張らなくても！」
「早く行かないとなくなっちゃう。」

啓輔は言った。

「手を離してくれれば後ろから付いていくから。」
「ダメ。すぐどっかいなくなっちゃう。」
「わかった、言うこと聞くからあたしの歩幅に合わせて。」

仕方なく明日香が言うと、啓輔は「ホント？」と嬉しそうに言って歩くスピードを落とした。

「よかった♪」

ご機嫌な啓輔。

「人いないとこでは離してよね。」
「ヤだ。」
「え？」
「絶対ぜぇーったい離さない。」

啓輔は明日香の手を強く握り笑ってみせた。
そのはにかんだ顔に、また不思議な胸の感覚が起き、明日香は首を横にブンブン振って掃おうとした。

いけないいいけない！
啓輔のペースにもっていかれないように気をつけなきゃ！
しかし、気付くと啓輔のペースに乗っかっていた。

啓輔は小さい頃から前向きで明るくて、明日香を楽しませてくれていた。
今も昔のまんまの啓輔。
泣き虫の啓輔。
小さい啓輔。
そんな啓輔が好きだった。

え？好きだった！？

明日香の頭の中に、一気に流れ込んできた啓輔との子ども時代。
急に顔が真っ赤になった。
自分だって、啓輔のこと従兄弟だなんて思ってなかったんじゃん！
握っている手に汗がにじみだした。

この不思議な胸の感覚って恋心の再発？
うそでしょ？

「暑い？」

啓輔は聞いた。

「え？あ、うん。」
「こんだけ人がいれば暑いよな。なんか飲む？」
「大丈夫。」

「そっか。」

啓輔は言った。

二人はビブレで福袋を買い、ブラブラしながら次から次へと買っていく啓輔を見て、さすが芸能人！と明日香は思った。

二人は場所を変えようと、電車に乗って海の方にでた。

再び買い物を始め、辺りが暗くなる頃、温かい飲物を買って海の見えるベンチに座った。

疲れた体にホットココアの甘さは体にしみる。

「疲れたよね？ごめんな、付き合わせて。」

啓輔が言った。

「全然いいょ。楽しかったし。」

「これ、付き合ってくれたお礼。」

啓輔はくまのキーホルダーを差し出した。

「かわぃぃ！ありがと！」

明日香は嬉しそうにカバンにつけた。

喜ぶ明日香を抱きしめた。

「ちょっと、啓輔っ！」

明日香は、ボッと顔が赤くなり慌てもがいて離れた。

「ごめん。」

啓輔はしゅんとして手を緩めた。
「怒ってるわけじゃないよ？」
明日香は慌てて言った。
「昨日のホントだからね？俺、明日姉が好きなんだ。」
啓輔は明日香に恋心を抱いてからのことを話してくれた。
「覚えてる？出発の日にプロポーズしたの。」
啓輔が言った。
「え？プロポーズ？」
明日香は首をかしげた。
「おれが一人前の俳優になったら、お嫁さんになってくださいって言ったんだ。」
「あたしは？」
「うんって言ってくれた。だから、まだまだ半人前だけど、今回の映画の主演が決まったのを機に明日姉を迎えに来たんだ。昨日も言ったけど、明日姉を守ってあげられるようになったよ。」
「そう・・・」
記憶をたどったが、出発の日だけ記憶が飛んでいる。
「覚えてない？」

「ごめん、出発の日だけ思い出せない。」
「そっか・・・」
啓輔は肩を落とした。
「ごめん。」
「いいよ、昔のことだし！」
啓輔は笑ってみせた。

二人が帰宅すると、賑やかな家が静かになっていた。
小さい子供たちのいる家族はすでに帰ってしまっていた。
家に残っているのは啓輔の家族だけだった。
みんなで夕食を食べているときに、啓輔が突然「俺まだここにいたいんだけど。」と、言い出した。
でもぉ・・・という啓輔の母を抑えて、母は快くＯＫしていた。
啓輔は翌日にバイクを取りに戻り、またこっちにくるそうだ。
お風呂から上がると、部屋から啓輔が出てきた。
「お風呂空いたよ。入れば？」
「あぁ。ねぇ、明日姉。」
「何？」
「もう少し一緒にいていい？」
返事に困ることを聞いてくる。
「1から惚れさせる。従兄弟の壁越えて俺のこと好きになってもらえるように頑張る。
嫌われない程度にね。おやすみ。」

啓輔は笑いながら言った。

「おやすみ」

それが精一杯だった。

明日香は翌日から仕事。
早めにベッドに入ることにした。

あたし、昔啓輔が好きだったんだ。
たまに見る懐かしい夢の相手は啓輔だった。
でも、なんで出発の日の記憶がないんだろう？

“１から惚れさせる”
惚れるのも時間の問題だなと、明日香は思った。
久しぶりに芽生えた恋。
複雑な恋。
ため息つくものの、明日香はすんなり眠りに入った。

第4話

1月3日。
支度をして部屋を出ると、啓輔も寝起きの顔で出てきた。

「おはよ。」

明日香は声をかけた。

「おはよ、仕事？」
「そっ。行ってきます。」
「いってらっしゃい。夜にこっち戻るから。」
「わかった、気をつけてね。」

明日香は下に下りていった。

家を出ると、大地が出てきた。

「おはよ。」
「おはよ。」

二人はいつも一緒に出勤している。

「忙しいかな。」

大地がため息まじりで言った。

「どうだろ？まだ三日だからね。」
「なぁ、今夜飲まないか？新年会しようぜ。」

「いいよ。」

バイト先は、洋食屋さん。
大地は厨房で、明日香はウエイトレス。
出勤時間も、休憩時間も、上がる時間も、いつも一緒。
明日香は気づいてないが、大地が全部明日香のシフトに合わせてシフトを出しているのだ。

休憩中。

「そういえば、従兄弟帰ったのか？」

大地はまかないをほお張りながら言った。

「なんかしばらくこっち居るみたいよ。」
「そうなんだ。」
「なんで？」
「いや、よくわかんない。」
「そういう大地がよくわかんないよ。」

明日香は笑って言った。

二人が働く洋食屋は、リーズナブルでおいしいと評判のお店。
新年早々、満席だった。

夕方からのバイトと入れ替わり、二人は上がって駅前の居酒屋に入った。

二人が職場の店を出て、楽しそうに歩いて居酒屋に入るとこをみていた啓輔。
啓輔は、早く戻れたから最寄の駅まで明日香をバイクで迎えにきていた。
楽しそうな二人に距離を感じた・・・。
啓輔はそのまま明日香の家に帰った。

ああやっていつも一緒にいるのに、なんで大地さんは気持ちを伝えないんだろう。
明日姉のことを好きなのは間違いないようだ。

不安な気持ちが苛立ちに変わる。
啓輔はビールを一気に飲んだ。

その頃、明日香と大地は居酒屋を出て帰る途中。

「飲んだな。」
「うん。気持ちいい。」

明日香は欠伸をした。

「なぁ、明日香。」
「ん？」
「お前、従兄弟のこと好きか？」

大地の突然の言葉にびっくりした。

「なんで？」
「この前、手つないで歩いてたから。」

見られてたんだ。

「た、たまたまだよ。あたしがすぐ迷子になるからって」

「ふ～ん」

大地の返事はそれだけだった。

二人は、小学生のときによく遊んだ公園に通りかかった。

「久しぶりに寄ってく？」

「うん、いいよ。」

明日香が答えると、大地は笑みを見せ公園に入っていった。

この公園には、回るジャングルジムがある。

よく二人で遊んだものだ。

「懐かしい！」

明日香はジャングルジムに乗っかった。

大地が軽く回して自分も乗った。

「こんなに小さかったっけ？昔は大きく見えた。」

明日香が言った。

「そうだな。身長が伸びたんだ。」

「うん。」

しばらくくるくる回ると、

「なぁ、明日香。」
「なに？」
「好きだ！」
「え？」

明日香はキョトンとしている。

「お前が好きだ！」

大地は間違いなく、明日香に好きだと言った。
少しスピードが落ちてきたとこで明日香はジャングルジムから降りた。
続いて大地も明日香の前で降りた。

「うそ・・・」
「うそじゃないよ。初めて会ったときから明日香が好きだったんだ。」
「だってあの時・・・」

中学3年

明日香は、大地に恋をしていた。
その想いを伝えるために、手紙を書いて大地のカバンに入れておいた。
放課後、忘れ物を取りに教室に行くと・・・。

「お前どーすんの？」

クラスから男子の声が聞こえた。
明日香は教室を覗いた。そこには大地と、クラスの男子がいた。
「好きですだって！」
クラスの男子の手に明日香が書いた手紙があった。
「どーするも何も、明日香のことはなんとも思ってねぇよ。姉貴見たいな感じ。」
『姉貴』
あたし世話役？
“ガタッ”
大地は音のする方を見て硬直した。
明日香が立っていたのだ。
「明日香・・・」
明日香は涙を浮かべてその場から走り去った。
「あたしをフったじゃない。」
「あれは違うんだ。あの時、友達と放課後残っててて、カバンに入ってるマンガ出そうとしてカバン掴んだら中身ごと落としちゃったんだよ。止めに入る前に読みあげられてた。みんなに冷やかされて恥

ずかしくて、ついあんなこと言ったんだ。」

明日香は黙っていた。

「ホントはすっ飛んで明日香のとこに行きたかった。オレも好きだって言いに。」

大地はまっすぐ明日香をみつめて言った。

「好きだ。」

「なんで今更・・・。」

「従兄弟が現れたから。」

「啓輔？」

「そうだよ。仲良く手つないでたし。」

「啓輔じゃなくたって、今までだってそんなこといくらでもあったじゃない！」

明日香とてだてに年は重ねていない。付き合った人が何人いてもおかしくない。

実際に、大地にも紹介したことある。

「いつも苦しかったよ・・・明日香に彼氏が出来るたんび。」

大地は振りたくて振ったわけじゃない。

明日香に口も聞いてもらえなくなって、自分の気持ちを伝えられないまま中学を卒業した。

高校受験のときは、こっそり明日香の志望校を盗み見て自分も受けた。

高校でもクラスが一緒になったのを機に明日香と少しずつ話すようになって仲が元に戻った。

何度も自分の気持ちを言おうと試みたが、彼氏がいたり、そんなこと言ってまた明日香に口聞いてもらえなくなてしまうんじゃないかというのが、何よりも今日までのトラウマになっている。
そんな大地を動かしたのは、啓輔の登場であった。
明日香を見る目は兄弟愛ではないことはすぐにわかった。

「従兄弟のこと、好きなのか？」
「わからない・・・好きなような気がする。」

明日香は言った。
大地はため息を一つはいて、

「いつもそうだ。俺が好きだって言おうとすると、お前には好きな奴がいる。」

明日香は何も言わなかった。

「もう帰ろう。」

大地は明日香を促し歩き出した。

「明日香に初めて彼氏が出来たとき、同じサッカー部の部長で悔しくてさ、自棄起こしてたまたま告られた子にＯＫしたんだ。１週間したくらいで、明日香は先輩と別れたよな？そしたらお前が気になって彼女とうまくいかなくなった。」
「あたしのせいだってか？」

明日香はむくれた。

「違うよ、嬉しかったんだよ。チャンス到来！みたいな。」

そう、あたしに彼氏が出来てしばらくすると、大地に彼女が出来て・・・もう吹っ切れたと思ってたのに気になって気になって、先輩と別れちゃったんだった。
結局、大地に対する気持ちが中途半端なまま今に至ってるんだよね。
気にしない振りしてるだけで・・・。

明日香の家に着くと、

「おばちゃん！遅くまで明日香連れまわしてごめん！」

すると、母が居間から出てきて、

「いいのよ！大地くんなら全然心配してないから。」

ニコニコで言った。

大地はおやすみと言って帰って行った。
明日香は部屋に入ると、ベッドに寝転びふぅとため息をついた。

何かしら？
今年は随分モテるのね。

気持ちが揺らぐ。
忘れてた小さな恋心と、一緒にいすぎて透明化しちゃった恋。

“コンコン”

「はぁい？」

「俺・・・」

「入りなよ。」

静かに戸を開け啓輔が入ってきた。

どことなく元気がない。

「どしたの？」

「ううん。大地さんと一緒だったの？」

「うん。新年会。二人だけど。」

「それだけ？」

明日香に一瞬だけ間があいたが、

「それだけ。」

「そっか。」

いまいち納得いかないような顔している。

「なに？」

「大地さんのことどう思ってる？」

どうって・・・

大地にも聞かれた・・・。

啓輔のこと好きか。

“好き”なんて言われたら、キモチ揺らいじゃうよ。

「大事な・・・」
「大事な？」
啓輔が不安そうな顔をした。
「大事な・・・幼馴染かな。」
目を反らしていた。
「明日姉、やっぱ好きなんだね。」
「好きっていうか、好きだったから。」
「やっぱそれだけじゃなかったんじゃん。告白されてキモチ揺らいじゃった？」
「啓輔。」
見透かされてる。
「俺だけ見てよ。」
「・・・・」
「こないだは嫌って拒否したのに、次の日はなんも言わなかった。今も。期待しちゃうよ。気持ちが動いてるんじゃないかって。」
「よくわかんないの。」
「俺、自信あるよ。明日姉のこと幸せにできるって。大地さんとの時間のが長いかもしんないけど、俺だって子供の時に明日姉と過ごした時間で大地さんに負けないくらい明日姉のこと見てる。ずっと憧れてた。俺を守ろうとする明日姉の後ろ姿。大人になったら今度は絶対俺が明日姉のこと守るって。なのに、簡単に取られてたまるかよ！」

啓輔はグイっと明日香を抱き寄せた。

「俺だけ見てよ。」

啓輔は明日香を離すと、何も言わずに部屋を出た。

啓輔は部屋に戻ると、布団に潜り込んだ。
あの明日香の困った顔。
当たり前だ。
１０年ぶりに会って突然、“好きです”言われて、時間かけていくようなこと言って“俺だけ見てよ”なんて言われたら。

今、明日香の頭と心の中はぐちゃぐちゃだろう。
自分に告られて、大地に告られて。

啓輔は頭をグシャグシャにかきむしった。
俺は何がしたいんだ。

翌日。

啓輔が下におりると、明日香がキッチンに立っていた。
啓輔に気づき、

「おはよ。」

と言って、コーヒーをいれた。

「おはよ。おばちゃんは？」

出されたコーヒーに牛乳と砂糖をたっぷり入れて一口飲んだ。
明日香のいれたコーヒーはその辺の高いコーヒーよりうまい。

「土日はお母さんの仕事お休みなの。だから、自分でご飯作って洗濯して掃除するの。朝からパパとでかけた。」
「そうなんだ。おばちゃんにだって休みないとな。」
「うん」

明日香は二人分のハムエッグをテーブルにおいた。

「俺の分？」
「うん。食べるかなって思って。」
「サンキュー！うまそう。」

明日香は少し微笑んでご飯をよそいに炊飯器を開けた。
ご飯と味噌汁と漬物が並んで、食べ始めた。

「いただきます。」
「どうぞ。」

好きな女の作るのはなんでもうまいのか、
ただ、明日香は料理がうまいのかわからないけど、すげぇうまい。

「うまい」
「よかった。」

明日香はホッとしたように言った。

少し沈黙があった。

「昨日はごめん。」

「え？」

「無茶なこと言って、ごめん。明日姉の気持ちも考えないで。」

明日香は黙って首を横に振った。

また少し沈黙があった。

「ねぇ、でかけない？」

「え？」

突然の明日香の誘いで行った先は、水族館。

隣には海岸もある。

二人は、水族館を見て海岸へ出た。

「なんか飲む？」

「うん。」

ホットココアを買って、浜にでた。

「用意いいでしょ！」

明日香がカバンからレジャーシートを取り出した。

「ホント。」

「やっぱ寒いね！冬の海は。」

「うん。」

ホットココアを一口飲んで思わずため息。

「温まる・・・」
「うん。」
「啓輔、口数少ないね。」
「そうか？」
「うん。少ない。」

水族館でペンギンやイルカを見て喜ぶ明日香。
思い悩んでいることを吹き飛ばしているかのようだった。

俺のせいか・・・？

「あたしね、何か忘れてる気がするの。それが、啓輔の言ってた別れの日のことだと思う。
子供ながらに決心して言った啓輔のプロポーズ。それに“うん”と言った、子供だったあたし。啓輔に気を使って言ったんじゃないと思うの。啓輔のこと好きだったから“うん”って言ったんだと思う。
でも、なんで忘れちゃったんだろうね？こんな大事なこと。」

明日香は啓輔を見て言った。

「明日姉・・・」

「ごめんね。一大決心して言ってくれたのに忘れちゃって。」

明日香の目に涙があった。
啓輔は、明日香を抱き寄せた。

「気にすんなよ。明日姉が振り向いたらまたちゃんと言うから。泣くなって。明日姉、ありがとう。」

「啓輔のこと大好きだからね。」
「明日姉・・・」
「なんで従兄弟なんだろうね。あたしたち。」
わんわん泣きながら言う明日香。
「俺は従兄弟なんて思ってないよ。」
啓輔は明日香にキスをした。
「ダメだよ・・・」
明日香はすぐに離れた。
「俺のこともっと好きになってよ。」
啓輔は強く明日香を抱きしめた。
「俺、明日香じゃなきゃダメなんだ。何年経っても、明日香のこと忘れることできなかった。」
しばらく二人はくっついて海を眺めた。
手をつないで。
「ずっとこうしていよ?」
啓輔は言った。
明日香は答えることができなかった。
何かが引っかかっている。
それがなんだかはわからない。

でも・・・キモチは走り出していた。

「またどっか行こうね！」

明日香は言った。

「ん。」

啓輔は言った。

第5話

翌日の日曜日。
啓輔は仕事にでかけていた。
母も朝から父とデートにでかけている。
明日香は、部屋でパソコンに向かって小説を書いていた。
恋愛ものを書きたいわけじゃないのに、今の複雑な気持ちが文章に出てしまう。

“好き”って気持ちは同じなのに、大きな壁が立ちはだかる。
彼は、そんなの怖くないという。
でも、主人公はその大きな壁を越える勇気がない。

なんでないんだろう？
“従兄弟”なら付き合ってもＯＫなはず。
結婚だってできたはず。
あたしは、何が怖いの？

手が止まってしまった。
そばにおいてあるケータイが鳴った。

“大地”

「もしもし。」
『おぅ、忙しいか？』
「全然。」
『そっか。どっか行かないか？』
「どこに？」

『そうだな・・・考えてなかった。』

明日香は思わず吹き出してしまった。

「なにそれ。」

『ごめん。』

「映画でも見に行かない？今書いてる本でかなり煮詰まってるの。」

『久しく行ってないな。賛成。仕度できたら家の前で。』

「ＯＫ。」

明日香は急いで支度を始めた。

２０分くらいで外にでると、ちょうど大地も外に出てきたとこだった。

「さすが、大地。」

「何年一緒にいると思ってるんだよ。」

大地といて楽なのはそこである。

気を使わなくていい。

明日香も大地も、お互いの行動パターンをわかっているから“支度できたら家の前で”で済んでしまう。

「車で行く？」

「じゃぁ、俺が運転するよ。」

「うん。」

今日は助手席。

大地も運転できるから、たまに大地の運転ででかける。

「出発。」

「ＧＯ！」

ＢＧＭはなぜか“アニソン”。

「つかもうぜっ！ドラゴンボール！」

こんな感じ。

３０分のドライブで映画館に到着。

お互い見たい映画も一致していたから、次の回の席をリザーブして時間潰しにブラブラすることにした。

大地は、家具を見るのが好きである。

家具売り場行っては、一人暮らししたら・・結婚したら・・こんなん買う、あんなん買うと言っている。

「その前に相手いるの？」

と、明日香は必ず聞く。

今日も同じことを言ったが、大地の返答はいつもと違った。

「明日香の返事次第だな。」

「え・・・」

「俺がいつも口にしてる“結婚したら”の相手は、明日香だよ。まっ、希望だけど。」

大地は笑って言った。

黙ってしまった明日香の頭をポンと軽く叩いて、

「難しく考えんなよ。いつもどおり楽しく行こうぜ。」

「うん。」

中学生のとき、大地に恋したきっかけになったのは、凹んでる明日香に、頭にポンって手を乗っけて「大丈夫。」って言ってくれたときだった。
大地はいつも明日香のそばにいた。
どんなときでも、なんかあればすっとんできた。
だから明日香は、両想いだと思っていた。
でも、“姉貴みたいなもんだよ”と言った大地の言葉は、明日香の自信をひっくり返した。
高校入るまで口きいてなかった大地とも、少しずつ話すようになったのは、クラスに同じ中学からの友達がいなかったからだ。
またいつものように大地はそばにいるようになった。
　でも、明日香の中に“大地への恋心”は完全にしまってしまった。
“友達”“幼馴染”へと・・・・。

こうして“友達”としてスタートして6年。
今になって告げられた大地のキモチ。
あのとき両想いだった事実。

でも、明日香の気持ちが啓輔に向いている。
だからといって、大地との関係が壊れるのも嫌。

「それにさ、たとえ明日香が従兄弟を選んでも、俺は明日香のそばにいるしな。」

大地ははにかんで言った。

大地はこういう奴だ。
だから好き。

「ストーカー？」
「そうそう！って、おぃ！」
ゲラゲラ笑いながら家具売り場を歩いた。
開場の時間になって、二人はポップコーンとジュースを買って席に着いた。
物語りは、悲しいラブストーリーだった。
泣きっぱなしの明日香の手を大地はそっと握った。
「らしくないことすんな。」
明日香はグシャグシャの顔でかわいくないことを言うと、
「明日香の泣く顔は得意じゃないんだ。」
大地はボソッと言った。
「泣かされてるわけじゃないのに？」
「うん。」
「なるべく頑張る。」
「いいよ。この映画グッとくるもん。泣けるってことは素直な証拠だろ。」
「どっちよ。」
映画館を出ると、あたりはすっかり暗くなっていた。
歩道をイルミネーションが彩っている。
「なんか食ってく？」

「うん、どちらでも。」
「一度帰って、歩いて飲みに行くか？」
「それ賛成！家で飲んでもいいし。」
「じゃ、コンビニ寄って帰るか。」

二人はコンビニでお酒とつまみを買って明日香の家に帰った。
啓輔はまだ帰ってないようだ。

「あらおかえり！大地くんと一緒だったの。」

母が出迎えてくれた。

「うん。これから飲むの。」
「おばちゃん、お邪魔します！」
「ゆっくりしてってね。」

明日香の部屋に入ると、

「従兄弟はまだ？」

大地が言った。

「みたい。なんで？」
「いちを気にしてんだよ。闘志燃やされても困るしさ。それに、言ってやりたいんだ。
俺は身は引かないけど、お前らを応援するぞって。」
「大地、言ってること矛盾してる」

明日香は笑って言った。

「つまり、明日香が幸せならいいんだよ。さぁ、飲むべ。」
大地は買ってきたビールを開けて飲み始めた。
「ふ～ん」
明日香も続いてビールを飲んだ。

啓輔の帰りは明け方になっていた。
明日香の部屋が明るかったから、啓輔はノックして明日香の部屋に入った。
すると、明日香の部屋に大地がいた。
二人とも、酔っ払って寝てしまったようだ。
床に座ってソファを背もたれにして二人は寄り添うように寝ている。
啓輔はたまらなくムカついた。
人の気配を感じてか、大地が目を覚ました。
「やべっ寝ちゃった。」
振り返ると、啓輔が立ったまま固まっていた。
「おかえり。お邪魔してます。」
「何してんですか？」
ちょっと声が荒くなった。
「怒るなよ。明日香と飲んでて気づいたら寝てたんだ。悪いな、驚かして。今帰るから、明日香のこと頼む。」

大地は立ち上がって、啓輔の肩をポンと叩いた。

「俺、明日香が好きなんです。大地さんは、明日香のことどう思っているんですか？」

「俺？啓輔くんは気づいてるんじゃないのか？俺もすぐわかったし。」

「じゃぁ、やっぱり。」

「俺はこのままだっていいよ。明日香が啓輔くんを選んでも笑ってくれるならさ。そりゃぁさ、誰にも渡したくなよ。でも、明日香が幸せならいいんだよ。もう、泣いた顔は見たくないんだ。だから、二人が付き合うんなら応援する。身は引かないけどね。今までだってそうしてきたんだ。」

大地は笑って言った。

「大地さん。」

「だから、明日香を泣かせないでくれよ。」

大地はそう言い残して帰っていった。

啓輔は明日香を抱き上げてベッドに寝かせた。

「明日香、重たい・・・」

「う～ん・・・」

啓輔は、明かりを消して部屋を出た。

大地さんは振りたくて振ったわけじゃなかったんだ。

その後、明日香が他にどんな奴と付き合おうが大地さんはずっと明日香のそばにいた。

ずっと明日香を見ていた。

ある意味、最強の恋敵・・・
明日香を想う気持ちは、もしかしたら俺以上かもしれない。
啓輔は思うのだった。

翌朝起きると、明日香はすでにでかけていた。
啓輔も、すぐに仕事にでかけなくてはならない。
明日香の母の用意した朝ごはんを食べて、ビックスクーターで都内のスタジオに入った。
楽屋に入ると、母から着信が入っていた。
折り返すと、

『いつまでそっちにお世話になるつもり？
もうすぐ映画の撮影に入るんだからこっちに帰ってらっしゃい！』

いつになったら子離れすんだ？
そろそろ帰らなきゃ、かぁさんがうるさいな。

収録が終わって、明日香の家に帰ると、お風呂から上がった明日香がビールを飲んでいた。

「おかえり！」
「ただいま。」
「ベッドにいれてくれたんだってね、ありがとう。」
「おぅ。」
「お風呂入っちゃえば？いいお湯だよ。」
「そうするよ。」
「うん」

明日香はビールを持って部屋に入ってった。
啓輔は、荷物を置いてお風呂に入りビールを持って明日香の部屋をノックした。

「一緒に飲まない？」
「いいよ。」

啓輔は、明日香の部屋に入ると、ソファに座った。

「昨日、大地さんと一緒だったんだね。」
「そうなの。映画見に行ってた。」
「そっか・・・」
「・・・ごめん。」

明日香は落胆する啓輔を見て慌てて言った。

「いや・・・なんで謝るの。」
「えっとぉ・・・なんとなく。」

啓輔は、明日香を抱きしめた。

「明日、自分ち帰るよ。かぁさんが帰ってこいって。もうすぐ映画の撮影入るしな。おばちゃんにも世話かけちゃうし。」
「そっか。うちのことは全然気にしなくていいけど、仕事じゃね。」
「合間にデートしよ？ご飯食べたり、買い物したり。」
「うん」
「大地さんとは・・・なんもなかったの？」
「なんもって・・・啓輔、大地はそんな奴じゃないよ。今までだって何度もここに泊まってるし。
啓輔が心配になるのもわかるけど、それは信じて。」

「ごめん・・・」

明日香が怒るのわかってて聞いた。
聞かずにはいられなかった。
一日中二人でいて、同じ部屋で飲んでて、なんもないに決まってると自分で決め付けることができなかった。

「明日姉？」
「ん？」
「キスしてもいい？」

明日香はしばらく返事しなかった。

「いいよ。」

うつむいたまんまボソッと言った。
啓輔は明日香に近づいてキスをした。
長い・・・長いキスだった。
啓輔はなかなか離さなかった。

「啓・・輔」

明日香は啓輔から無理やり離れた。
このまま続けたら、押し倒しかねないと思った。

「離れたくない。」
「啓輔」
「大地さんに誘われれば、いつもどおりに一緒にでかけるんでしょ？」

凄い不安そうな顔をする。

「あたしは、大地とは今まで通りの付き合いしてくつもりよ。」
「そうだよな。無茶言ってごめん。」
「ううん。大丈夫。デート楽しみにしてるね！」
「ん。休みできたらすぐ連絡するよ。」
「うん。」

翌朝、啓輔は実家に帰っていった。
もう、付き合ってるに等しいよね。
明日香は思った。
それを大地に話すと、

「そっか。やっぱし啓輔くんの方選んだか。まっ、俺は諦めるつもりもないし、これからだって、今まで通り明日香のそばにいるつもり。覚悟しとけ！」
「覚悟も何も・・・（笑）今までだってそばにいてくれたじゃん。急によそよそしくされても困るし。今まで通りいこうよ。啓輔のこと好きだけど、大地との今の関係が壊れるのもイヤなの。わがままでごめん。」
「いいよ。過去振り返ってもしかたないけど、あんとき堂々と“俺は明日香が好きだ”って言ってれば、今ごろ結婚してただろうなって思う。でも結局、啓輔くんが現れて略奪されたりしたかもしんないな。あんときの俺の勇気のなさの結果が今なのさ。」
「どこまで妄想？」
「明日香と一緒で妄想癖なんだ（笑）」

啓輔から映画の撮影は順調だとメールがきた。

なんでも、1ヶ月という短い期間で撮るらしく、毎日遅くまで撮影があるらしい。
その撮影が終わって、ようやくできた休みで会うことになった。
久しぶりの啓輔は、髪型が変わっていた。

「かっこいいじゃん。」
「ありがと」

映画をみたり、お茶したり・・・
楽しい時間はあっという間に過ぎていく。
啓輔のバイクで家まで送ってもらった。
バイクの後ろに乗るのは初めてだった明日香。
すごい気持ちがいい。
今度はバイクの免許でも取ろうと思ったくらいだ。

「ごめんね、送ってもらっちゃって。」
「いいよ。1分でも長くいたいじゃん。」
「そだね。」
「また連絡する。」
「うん。」

啓輔は、明日香を抱き寄せた。

「撮られたら大騒ぎだよ。」
「俺はかまわない。」
「俺はよくても、芸能人としての啓輔は?おばちゃんは?」
「わかったよ。」

啓輔は明日香を離した。

「またね！気をつけて帰るんだよ。」
「おぅ！」
啓輔はバイクを発進させて帰って行った。
そんなデートを何回か繰り返して半年が過ぎた頃、明日香の消えた記憶がよみがえる事が起きた。
明日香がバイトから帰ると、母が心配そうに出迎えた。

「明日香。」
「どしたの？」
「ゆかりさんが来てるのよ。明日香が帰ってくるのずっと待ってるの。
用件も言わずにただジッと。」
「え？」

ゆかりさんとは、啓輔の母である。
明日香はそのまま居間に向かった。

「こんばんは、なんかお待たせしちゃったみたいで。」
「あら、おかえりなさい。いいのよ、気にしないで。こっちが勝手にきて待ってたんだから。」

啓輔の母はいつもと変わりはないように思えた。
でも、自分に用あって随分と待っていたようだから、ただ事じゃない。

「で、用って？」
「明日香ちゃんにいいお話があるのよ。」

そう言って、一枚のＡ４サイズの封筒を出した。

「エリート商社マン年収１０００万で２８歳で次期社長。親のすねかじって生きてるようなバカ息子ではないの。自分で入社試験受けて自分の力で今の地位に上った頑張り屋。どうかしら？」

お見合い写真を見せながら、セールスレディのような口ぶりで話す。

「どうかしらって、つまりお見合いですよね？」

「そうよ！もう、１回や２回お見合いしたっていいんじゃない？」

「はぁ。でも・・・」

「だってお隣の彼とは付き合わないんでしょ？」

「ええ。」

なんで大地がでてくんだ？

「おばちゃん・・・」

「何？」

「はっきり言ってよ。啓輔のことでしょ？」

少しだけ沈黙が流れた。

「そうよ・・・啓輔に女の影があるから調べたら、明日香ちゃんだったの。」

啓輔の母の目つきが変わった。

このところ、啓輔の口から“明日香”の名前を聞くことが多くなった。

そして、たまの休みで必ずでかけてしまう。

ゆかりは女が出来たと、調べさせたら相手の女が明日香だとわかっ

た。
たとえ明日香でなくても、啓輔に女の影はあってはならなかった。
ゆかりは密かに所属している事務所の社長の娘、“きらら”との縁談を進めていた。
啓輔のことは期待してくれてるが、一人娘の旦那となればなかなかイエスと言わなかった。
幸運なことにきららが啓輔を気に入っていたから、あと一押しと踏んでいた。
ここにきて、啓輔の大好きな明日香が啓輔に向いているとなれば、二人はくっついてしまう。
そもそも、年末年始の集まりに啓輔を連れて行ったことから狂いだした。
もう９０歳になろうとする啓輔の祖父に会わせたくて行ったが・・・・。
啓輔も１０年ぶりにみんなに会いたいとその年は頑張っていた。
でも、あの二人を再会させるんじゃなかった・・・
スケジュールを入れておくべきだったと、ゆかりは後悔した。
結婚秒読みか！と言われたお隣の彼“大地”とはくっついていない。
大地が駄目ならと、お見合いの話しを持ってきたのだ。

「あのコはね、尋常じゃないお金と時間がかかってるの。やっと掴んだ主演で、女の影、しかも明日香ちゃん。どういうこと？あのホームでの約束は忘れたの？」

ホームでの約束・・・？

「待って、おばちゃん、約束って何？ホームって啓輔が東京に行く日のことよね？あたし、あの日の記憶がまったくないの。」
「明日香ちゃん、覚えてないの？」
「うん。その日だけぽっかりと穴が開いたように・・・」

明日香の言葉に一瞬うろたえたが、ゆかりは静かに話し始めた。

「あの日、啓輔は明日香ちゃんにプロポーズしたわ。啓輔が明日香ちゃんのこと好きなのは知ってた。兄弟として慕ってるって思ってたの。でも、まさか結婚まで考えてるなんて思いもしなった。明日香ちゃんと離れずに芸能活動できないのか散々聞かれたわ。１０歳の啓輔は明日香ちゃんに本気だった。しかもあなたは、うんって言ってしまった。だから慌てて自販機にジュース買いに行く振りして明日香ちゃんを呼び出して・・・。」

「呼び出して？」

「啓輔は将来期待されてる卵。大物になった啓輔は明日香ちゃんに言ったことを忘れてしまう。言い方悪いけど、明日香ちゃんの存在はこれからの啓輔にとって邪魔なの。啓輔の夢を壊さないで。ごめんね・・・って・・・。」

一気に１２歳だった明日香の記憶がよみがえった。

そう、おばちゃんに言われて、将来有望視されている啓輔のために自分は啓輔を忘れなきゃなんない。

おばちゃんの口調は穏やかだったが、目は真剣そのもので、威圧感さえ感じた。

啓輔のために・・・

必死で言い聞かせた。

それが明日香の胸に深く傷つけていた。

“邪魔になる”

啓輔の邪魔はしたくない。
明日香はそっとその出来事を胸の奥の奥の隅に閉まってしまったのだ。

一方、ゆかりも明日香が思った以上に傷ついてしまっていたことを知った。
でも、全ては啓輔のため。
自分のため。
ゆかりは明日香に頭をさげた。

「お願い・・・啓輔の邪魔しないで。啓輔がここまでなるのに、いろんな仕事してきた。お水だって風俗だってやったわ。男騙してお金作ったことだってある。全部啓輔のため。啓輔は、まだ先があるの。これからなの！もう、私じゃ使いもんにならない。だから、これからのために啓輔は結婚するの。」
「え？」
「啓輔はね、事務所の社長の一人娘との縁談が進んでるの。だからお願い・・・邪魔しないで。普通に考えればわかるわよね？明日香ちゃんと啓輔が恋仲なんて周りが許さないことくらい。啓輔の方が明日香ちゃんに夢中なら、明日香ちゃんから振ってほしいの。」

この短時間で啓輔の母はやつれて帰って行った。
そんだけ啓輔への思い入れが半端ないのであろう。
啓輔の母が置いていった、お見合い写真。

「明日香、大変なことになっちゃったわね。」

母はコーヒーを入れて明日香にだした。

「ごめん・・・かあさん。」
「謝ることないわ。おかあさんも啓輔くんの気持ち知ってたから。明日香といるときのあの啓輔くんの楽しそうな顔。おかあさんは明日香が啓輔くんを選んだことは間違いじゃないって思ってる。だって好きなんでしょ？」
明日香は黙って頷いた。

「お見合い・・・したほうがいいのかな。」
「おかあさんは、明日香には好きな人と結婚してほしいな。」
「かあさん・・・」
「おかあさんもね、お父さんとは縁談なの。好きだった人と一緒になれなかった。」
「イヤじゃなかった？」
「そりゃぁ、好きじゃない人だしね。でも、一度だって不幸だって思ったことないの。お父さんとっても優しい人でね。愛情を押し付けたりする人じゃなかったの。」
「そうだったの・・・」
「だから、明日香には普通の結婚してほしいなぁ。明日香が幸せなら啓輔くんだっていいと思うの。よく、考えなさい。」
母はそう言うと、夕食の支度を始めた。
あたしが身を引くことが、啓輔のためになるのか・・・？
啓輔の母の苦労が、絶対啓輔のためになっているとは思えない。
でも・・・
明日香のため息は増える一方である。
「明日姉、元気ないね？」

「そう？そんなことないけど。」
「ため息ばっか。」
「ゴメン。」

啓輔の母が来てから数週間後のデートの日。
明日香の頭はもうパンク寸前だった。

「今夜、明日姉の家行ってもいい？」
「え？大丈夫なの？」
「何が？」
「やっ、えっとぉ・・・」
「やっぱ変だなぁ。なんかあった？」
「ないってば！ほら、おばちゃんに言われないの？外泊なんかして。」
「あぁ。明日姉の家でもうるさいんだよな。」
「あることないこと書くのが記者だから。」
「まぁな。俺は別に撮られてもいいけど。」

啓輔は良くても・・・
なんだけどね。

明日香と啓輔は、啓輔のバイクで明日香の家へと帰った。

「あれ？かあさんまだ帰ってないんだ。」
「どっか行ってるの？」
「うん、同窓会。」

高校時代の同窓会があると言って、嬉しそうに出かけて行った。
もしかしたら・・・一緒になるはずだった彼と飲んでるのかもしれない。

高校時代の同級生だったらしい。

「お風呂入ってきちゃってもいい？」
「いいよ。」

明日香は部屋に入るなり、バスタオルを持ってお風呂に行った。
啓輔は、漫画でも読んで待っていようと、明日香の本棚を物色した。
紙の束を見つけて、引っ張り出してみると、バサッと何束か床に落ちてしまった。
急いでかき集めると、紙の束とはかけ離れて違う物があった。
誰が見ても“お見合い写真”
啓輔は恐る恐る開くと、見知らぬ男性が写っていた。
そこにカラスの行水の明日香が戻ってきた。

「啓輔も入る？」

部屋に入ると、啓輔の母ゆかりが置いていったお見合い写真を開いて啓輔が固まっていた。

「啓輔・・・」
「何・・・？これ・・・」
「・・・」
「お見合い・・・すんの？」
「・・・わからない。」
「だから、様子おかしかったんだね。」
「・・・」
「なんで・・・お見合いなんて。」
「薦められたからよ。」
「なんで断んないんだよ！」

明日香は答えなかった。
なんで・・・？
「俺じゃダメってこと？」
明日香は首を横に振った。
「じゃぁ、なんで！」
「啓輔のためよ。」
「え？」
「社長の娘さんと、結婚の話しがすすんでるんでしょ？」
「え？なんだよそれ。」
「やっぱり・・・啓輔知らないんだ。」
「なんのことだよ。」
「おばちゃん、啓輔の先のこと考えて、社長の娘さんとの縁談が進んでる。」
「俺そんなこと知らない。俺は、明日姉と一緒にいたい。」
「この１０年、啓輔のために必死になってきたおばちゃんの気持ちわかる？この先だって、啓輔には輝いていてほしいのよ。でも、もうおばちゃんにはそんな若さは残っていない。だから・・・」
「じゃぁ、俺のキモチは？」
明日香は黙ってしまった。
俺の気持ち。
そんなことは明日香にだってわかっていた。
「明日香・・・」
啓輔は明日香を抱きしめた。

「なんとかするから、誰かのとこに行こうなんて考えないで。」
「啓輔は成功しなくちゃなんない。」
「確かにかあさんのおかげだよ。今までこうして演技やってこれたのは。でも、今あるのは、明日香がいたからだよ。」
「啓輔。」

啓輔は明日香にキスをした。
そのままベッドに押し倒すと、明日香の髪をなでた。

「啓輔、ダメ・・・」
「一緒になろ？もっと好きになるから・・・」

啓輔は切なげな瞳で言う。
頭では駄目だとわかっていても、明日香の体は拒否しなかった。

啓輔の寝息が聞こえると、明日香はそっとベッドから出ようとした。
でも、啓輔は明日香を離さなかった。
ほんとに寝てる？
すると、啓輔はボソッと寝言を呟いた。

「明日香・・・どこにも行かないで・・・・離れてかないで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

すすり泣くようにも聞こえた。
どうやって嫌いになれって言うのよ・・・
明日香は思った。

翌朝、啓輔は明日香の職場に送ると、真っ直ぐ家に戻った。

「啓輔帰ったの？あんまり遊びすぎて風邪でもひいたら・・・」
ゆかりは、啓輔の形相に固まってしまった。
「どういうことだよ、社長の娘と結婚って。」
「明日香ちゃんに聞いたのね？」
「明日香に俺と別れるようにお見合い写真渡したのも。」
「えぇ。」
「なんでっ！」
「啓輔のためよ。ここで浮かれてたら駄目。この先の俳優人生のためにあなたは結婚するべきよ。」
「俺は明日香が好きなんだ。」
「結婚でもする気？」
「あぁ、俺は考えてる。」
「明日香ちゃんのことなんにも考えていないわね。」
「え？」
「周りが許すと思うの？回りから変な目で見られて辛い思いするのは明日香ちゃんなのよ。啓輔ひとりだけの問題じゃないの！」
俺は、自分の気持ちばっか押し付けて、明日香の負担や将来のことを考えていなかった。
自分の未熟さ、身勝手さに、怒りがこみ上げていた。
「啓輔？一度、社長の娘さんに会って。あなたのこと気に入ってくれてるのよ。
明日香ちゃんのこと好きなのはわかるわ。でも、絶対明日香ちゃんと啓輔が幸せになるとは思えない。」
啓輔は部屋に戻ってベッドに寝転がった。

俺の幸せ・・・
明日香の幸せ・・・
俺と一緒になっても明日香が幸せじゃなかったら・・・
明日香は俺の将来のためにお見合い写真を受け取った。
じゃぁ、明日香の幸せのために俺は社長の娘と結婚するべきなのか？
違う・・・二人とも幸せじゃない。
誰のためにもなっていない。
どうしたらいいんだよ・・・。

第6話

ある収録の日。
控え室に戻ると、ゆかりが入ってきた。
「啓輔、きららちゃんが差し入れ持ってきてくれたわよ。」
ゆかりが嬉しそうに、社長の一人娘“きらら”を向かいいれた。
「こんにちわぁ！」
くるんと巻いた髪に大きな瞳のきららが手に大きな箱をもって入ってきた。
「うちの啓輔です。どうぞよろしくね。」
「きららです。啓輔さんにお会いできて嬉しいです。」
ペコリと頭を下げた。
啓輔も軽く会釈をした。
「お口に合うかわからないんですけど、ケーキ焼いてきたんです。よかったら食べてください。」
「ありがとう。後で頂くよ。」
「はい！パパが今度食事でもと言っておりました。」
「まぁ、是非にとお伝えくださいね！」
ゆかりがきららを出口まで送りに行った。
その後、きららが頻繁に訪れるようになった。

必ずそばにはゆかりがいて、食事に誘われれば断ることができなかった。
ちっとも楽しくなかった。

「啓輔さん。」
「何？」
「この後、少し散歩でも行きませんか？夜景がとても綺麗と聞いています。」
「啓輔、お付き合いしてあげなさいよ。」
「はぁ。」

ゆかりに言われるがまま、啓輔はきららと外にでた。
言うこと聞いてるおかげで、最近明日香と会うためにでかけても、うるさく言わなくなった。
明日香は今何してるんだろ？

「啓輔さんは、趣味とかあるんですか？」
「趣味・・・バイクでツーリングしたり、写真撮ったり。」
「素敵！今度連れてってください！」

啓輔は応えなかった。
後ろには明日香が乗るから。

「啓輔さん？」
「あっ、ごめん行こうか。」
「はい・・・」

啓輔ときららは夜景の綺麗な広場に出た。

「啓輔さん、綺麗ですね！」
「あぁ。」
「あたしと、結婚してください。」
「え？」
「あたし、啓輔さんが好きです。あたしは啓輔さんを幸せにできます。」
「いや・・・・」

きららは啓輔に抱きつくと、

「あたしが忘れさせてあげます。好きな人のこと。啓輔さんに尽くしますから。」
「きららちゃん・・・・？」

なんで知ってんだ？
かあさんか・・・・。

抱きつくきららを離そうと肩を掴んだとき、かすかに「啓輔」と聞こえた。
辺りを見回すと、明日香が立っていた。

「明日香・・・・」

明日香は笑顔で手を振ってその場を立ち去った。
明日香の目に涙が浮かんでいるようにもみえた。

「明日香っ！」

追いかけようとすると、きららが押さえつけた。

「駄目！行かないで！」
「離して。」
「いや。離さない。」

もう、明日香の姿は見えなくなっていた。

明日香は今日友達と広場の近くで飲んでいた。
友達と別れて、広場を通って帰るところだった。
あの場面は痛かった。
嫉妬・・・・これでいいんだと思う気持ち・・・複雑だった。
言い聞かせる自分・・・啓輔が愛おしいと思う気持ち・・・・
気が狂いそうになる。

明日香は自然に大地の家の前に立っていた。

「明日香・・・」

明日香を部屋に入れた。
明日香の様子ですぐわかった。
啓輔となんかあったなと。

「ほれ、ビール」
「ありがと。」

明日香はビールを受け取ると、ベタッとジュータンに座った。

「どした？」

大地は缶ビールを開けながら、明日香の隣に座った。

「うん・・・何が一番いいのかわからなくなって。」

「啓輔くんを諦めるか諦めないかってことか？」

「これでいいって思う自分と、嫉妬する自分。言い聞かせようとする自分に疲れた。」

「そっか。たいしたこと言えないけどさ、自分に正直でいいんじゃないか？」

明日香がヒックヒック言いながら泣き出した。

「おおぃ、明日香大丈夫かよ？」

大地はティッシュを明日香に渡した。

「大地・・・ゴメン。」

「気にすんな。」

「胸貸してくれる？」

明日香は大地の胸にオデコを乗っけた。

「もう、どうしたらいいかわかんなくて。自分がどうしたいのかも・・・わかんない。」

大地は、明日香を強く抱きしめた。

「おれんとこ来いよ。俺はお前の従兄弟じゃないし、芸能人でもない。小６の時、明日香に一目惚れして、今も明日香しか見えてない俺にさ。」

「ハハ・・」

冗談でも、そうしてしまおうかと思った。
大地だったらどんなに楽なんだろうって。
一緒にいても、話してても、飲んでても、ホッとする居場所。

「本気だよ？俺は明日香と結婚まで考えてたんだ。」
「知ってる。」

大地はそのまま明日香を押し倒した。

「結婚しよ？」
「だ・・・」

大地は無理やり明日香の唇をふさいで、服を脱がし始めた。

「もう、俺から離れてくなよ・・・愛してるんだ。」

嬉しかった。
もっと早く知ってたら・・・。
こんなに苦しい思いしなくて済んだかもしれない。
楽になりたかった・・・
誰かに寄りかかりたかった。
大地に身を委ねてしまってもいい。
もともと好きな人だったんだから・・・
きっとまた好きになれるかもしれない。

大地のほてった大きな体。
気持ちが伝わるほど優しく抱いてくれる。
この人、ホントに好きなんだって。
あたしの体が素直にこたえる。

気持ちいいが涙に変わる。

ふと、目が覚めた。
隣に大地がいる。
啓輔とは違う、腕の感触と温もり。
啓輔にない、安心感。

でも・・・・・・・・・

サイテーだ・・・。
あたし・・・ぽっかり開いた穴埋めたくて大地と寝た。
これじゃ、啓輔も大地も傷つけてしまう。
あたし・・・・なんてことを・・・。
多分、誰でもよかったんだと思う。
誰とでも寝れた気がする・・・・最悪だ。

明日香は起き上がった。

「明日香？」
「あたし・・・・」
「どした？」
「なんてことを・・・」
「後悔してるの？」

大地も起き上がって、明日香の肩を抱いた。

「ごめん。明日香の気持ちに付け込んで抱いて。でも、俺は幸せだったよ。これからもお前のこと大好きだし、ずっと友達でいたい。」
「大地・・・ごめん。思わせぶりなことして・・・」

「大丈夫。啓輔くんより明日香を知ってるつもり。俺でよかったんじゃないか？あの雰囲気じゃ相手が俺じゃなくても寝たな。」

大地にっと笑ってみせた。
これが大地である。

「ごめん・・・」
「図星かよぉ！しょうがねぇな。」

大地は明日香の頭をグシャグシャっとした。

「ホントに好きだった。」
「うん。ありがと。」

昨日のあの晩から、何度かけてもメールしても明日香に連絡がつかない。
啓輔は、今日の仕事が何時になっても終わったら明日香の家に行くつもりでいた。

早く終わんないかな。

イライラした気持ちが出ているのか、取り直しが続く。
結局、終わったのは明け方2時。
それでも啓輔はバイクを走らせ明日香の家に向かった。
到着すると、明日香のケータイを鳴らした。
出るまで・・・・切られてもしつこく・・・
意外にも、すんなり明日香は電話にでた。

「もしもし。」
『啓輔？どしたの？こんな夜中に。』
「昨日のこと謝りたくて。家の前にきてんだ。」
『先に言いなよ。今開ける。』

明日香がパジャマにカーディガン姿で玄関を開けた。
部屋に入ると、明日香は暖房を入れた。

「寒かったでしょ。コーヒー入れるね。」

明日香はコーヒーをセットして、スイッチを入れた。
コーヒー豆の香りが部屋を覆う。

啓輔は、後ろから明日香に抱きついた。

「昨日、泣いてた？」
「ちょっと・・・」
「ごめん・・・あのコと食事行くと、かあさん、あんまりうるさく言わいんだ。でも、頭ん中は明日香もことばっかで、次明日香に会うためにもかあさんについて行くしかなかった。」
「それでいいんだよ。あのコと順調にいけば将来が約束される。」
「まだそんなこと言ってんのかよ？それでいいのかよ？」
「いいなんて思ってない！おばちゃんがしてることが絶対啓輔のためになってるとは思わない。でも、おばちゃんの苦労は知ってる。ここまで啓輔を押し上げてきたのはおばちゃんなのよ。啓輔こそが夢なの。それにはあたしがいちゃ駄目なの。啓輔があたしを好きでいちゃいけないの。」
「どうしたらいいんだよ・・・俺は明日香を忘れたらいいの？忘れられるわけないだろ？」
「戻るだけだよ・・・従兄弟の啓輔と明日姉に。」

「嫌だ・・・好きなんだよ!明日香が・・・・・。」

子供のように泣く啓輔の涙は素直で綺麗な涙。
あたしの涙は・・・
嘘と、汚れで覆い隠された灰色の涙。

泣き疲れた啓輔はソファで寝てしまった。
啓輔の寝顔は、子供の頃のまんま。
喧嘩しても、必ず一緒にお昼寝をした。

明日香はある決心をした。
このままじゃいけない。

啓輔も、あたしも・・・

数週間後・・・

「お疲れ様です。」

啓輔は控え室に戻ってケータイをみた。
明日香からメールも着信もない。
あの夜以来、自分からしてもなかなか捕まらなかった。

どうしちまったんだよ・・・。

ケータイが鳴った。
知らない番号だった。

「もしもし？」
「啓輔くんか？」
「大地さん！」
「どうしたんですか？明日香から聞いたんですか？よくわかりましたね？」
「明日香のお袋さんにに言って調べたよ・・・大変だった。そんなことより、空港へ行け。」
「空港？」

なんで・・・
どこ行くんだよ。

啓輔はバイクで空港に向かっていた。

行くな・・・
行かないでくれ・・・

「空港？」
「明日香、ボランティア活動しに世界各国周るんだって。」
「え？」
「もう、帰ってこないつもりかも・・・早く行って止めてこいよ。」

明日香が下した決断。
自分から啓輔と離れることだった。
むしろ、逃げたのかもしれない。

このままじゃ、啓輔は明日香ときららとゆかりの狭間で悩み、明日香は寂しさを大地や他の誰かで埋める。
大地もツラかっただろう。
大地の優しさに甘える自分にもさよならしたかった。
それで全て解決したわけじゃない。
でも、何か変えたかった。
啓輔も諦めるかもしれない。
明日香も、異国でいろんなことに触れ、文化の違いや言葉の違いで、考える余裕がないかもしれない。
これでよかったかどうかはわからない・・・

「ほんとに行くのか？」
「うん。啓輔には言わないで。」
「なんで？」
「絶対、引止めにくるから。」

明日香は笑った。

何がおかしいんだよ・・・
当たり前だろ？

「啓輔くんはきっと待ってると思うぞ。」
「そうかもね・・・」

大地はその言葉で、もう帰ってこないかもしれない・・・と思った。
啓輔の連絡先を突き止め、啓輔に伝えた。
伝えなきゃいけないと思った。
啓輔が行けば、思い止めるかもしれないと思ったからだ。
このままじゃ、二人は一緒になれない。
好きあってるのに、なんで引き離されなきゃなんないんだ。

啓輔は出発ロビーに到着していた。
あたりを見渡したが、明日香を見つけ出すことは困難だった。

「明日香ぁー！」

叫んだって仕方ないのはわかっていた。
でも、諦めたくなかった。
空港内走り回って、結局みつからなかった。
啓輔は座り込んでしまった。

「明日香・・・・行かないでよ・・・・なんで行っちゃうんだよ・・・」

こうして、俺の前から“明日香”はいなくなってしまった。

何がいけなかったのか・・・
3年経った今、わかったような気がする。
自分に勇気がなかった。
芸能界を捨ててでも、明日香を取る勇気が俺にはなかった・・・・。
どんなに明日香を愛していても、俳優を捨てられなかった。
両方ほしかった。
ただのガキだったんだ。
そして全部失った・・・。

第7話

…眩しい…ここは…どこ？
向こうには原っぱ…懐かしい匂い。

「…すねぇ！」

誰かの声がする。
とても懐かしい声は…誰？
声のする方に走っても走ってもそこに行けない。

楽しい光景。
ここは原っぱだ。
誰かと追いかけっこしている。
あっ、転んだ。

「明日姉、大丈夫？」

誰かが手を差し延べている。
誰かさんの顔は？
誰かさんの手は大きくて温かい。
記憶にある感触…。
見上げると逆光でよく見えない誰かが微笑んでいる。
誰？
誰かの頭で差し込む光が消えると、啓輔がいた。

「明日姉！」

３年後

明日香は目を覚ますと涙が溢れていた。
啓輔と再会するまで、よく見ていた夢。
ずっと誰だかわかんなかった。
遠くの君が啓輔とわかったとき、啓輔は自分にとって特別な存在だと思った。
その夢を、啓輔と離れてからほぼ毎日見ている。
アフリカにいても、ケニアにいても、毎晩・・・。
２年の任期を終えた明日香は、地元には戻らず京都で暮らしていた。
初めは転々としていたため親にすら居場所を教えていなかった。
ようやく落ち着いたのが京都だった。
週に１回は電話を入れてる。
嬉しそうに話す母の話しは２時間も３時間もかかる。
大地は結婚して子供が生まれて実家を二世帯に建て直したそうだ。
今度お祝いを贈ってやらなくては。
母は決して自分の居場所や啓輔のことには触れなかった。
啓輔がＴＶにあまり映ってないことには気づいていた。

幸せにはなれなかったのかな・・・

明日香は涙を拭いて、コーヒーをセットして顔を洗いに洗面所に行った。
４．５畳一間と台所・トイレにお風呂がついた部屋に一人暮らし。
清水の御茶屋で働いている。
今日も朝から仕事。
明日香お気に入りのブレンドが落ち終わる頃、朝食も出来上がっている。

トーストにヨーグルト。
いい生活はできない。
アフリカやケニアは子供がお金を稼いで家族を食べさせていく。
あるフィリピンの町では、ゴミを集めて生計を立てている。
目の当たりにしてきた明日香にとって、今の生活でも贅沢でありがたいと思った。
これも成長だろうか。

今日もいいお天気。
修学旅行生が多いけど、清水はなかなかいいとこだった。

「ありがとうございましたぁ！」

明日香はお茶を飲んでいた茶碗を下げに表にでた。
見上げると、雲ひとつない晴天だった。

啓輔・・・元気にしてる？
今日はこんなにいいお天気だよ。

ホッとするのもつかの間、茶碗とお皿をまとめてお店に入ろうとした。

「おねぇさん、こっち向いて。」
「え？」

店の前の小道でカメラを構えている人がいた。

「やっとみつけた。」

聞いたことある声・・・。

カメラを提げ、立ち上がったその人は、

「啓輔・・・・」

啓輔だった。
ジーパンにＴシャツ。
キャップをかぶって、
首にカメラをぶら下げている。

「明日姉！」

店内に入った啓輔は、お団子とお茶のセットを注文した。

「お待たせいたしました。」

明日香は啓輔の前にお団子とお茶をだした。

「いいとこだね。」
「そうでしょ。」
「仕事何時まで？待っててていい？」
「お店閉まるの１７時なの。」
「いいよ、写真撮りながら時間潰すから。」
「わかった。」

もう会うことないと思ってた啓輔が、目の前にいる。
おいしそうに食べるお団子も、笑ったときの頬の上のシワも・・・・
もう、見れないと思ってた・・・・
声も聞けないと思ってた・・・

１７時に店じまいをして外に出ると、啓輔が立って待っていた。

「お待たせ。」

「行こうか。」

３年ぶりに二人で歩く。

なんだか照れくさくて、シーンとしてしまう。

「疲れた？」

「ううん。店主のおばちゃんいい人でね、お客さんがいないときは休憩させてくれるんだ。お団子もほら！あまったのくれるの。」

明日香はあまったお団子の包みを見せた。

「お団子おいしかった。心がこもってるんだ、あのお団子には。」

「ひとつひとつ丁寧に作ってる。あの年で一人で仕込みやってんだよ。」

「たいしたもんだ。」

明日香は、夜になるとお店や電灯できらきらする川へ啓輔を連れてった。

啓輔は何枚も写真に収めていた。

明日香は川をボーっと見とれながら、今日の疲れを癒すのが日課だった。

パシャッ・・パシャッ・・

啓輔を見ると、カメラのレンズは明日香の方に向いていた。

「ヤダ、撮んないでよ。」
「綺麗だよ。」
キザだけど、ちょっと胸がキュンとなってしまった。
「どうやって探したの？」
「バイクで日本縦断。」
「日本中探したの？」
「うん。」
明日香は何も言えなかった。
「元気だった？」
「うん。」
「ここはどのくらい？」
「1年はいない。」
「そっか・・・」
沈黙があった。
「明日姉のそばにいつも一緒にいてくれる人はいる？守ってくれる恋人とか・・・旦那さんとか・・・」
明日香は首を横に振った。
「好きな人は？」
「好きな人はいるよ。」
「そうだよな・・・どんな人？」
「自分に正直で、真っ直ぐな人。」
「なら安心だ。」

「誰にも居場所教えてないのに、ここまで日本中回って会いにきてくれた人なの。」

明日香は啓輔を見た。

「それって・・・オレ？」

明日香は黙って頷いた。

啓輔はゆっくり明日香を抱きしめた。

「会いたかった。何度も忘れようとしたけど、できなかった。日本に帰ってるって聞いて探すことにしたんだ。」

明日香が旅立った後、きららとの縁談も破談にし、事務所も辞めた。新しい事務所に入ったが、きららとの破談が尾を引いて、なかなか仕事がもらえず引退してしまった。

母ゆかりも、啓輔の明日香への想い入れに観念し啓輔を自由にした。明日香が日本に戻っていると明日香の母から聞いて、貯金と、バイクとカメラを持って、日本中を明日香探しの旅をしていた。

「俺・・・自分のことばっかで。明日香も俳優も両方ほしかったんだ。どこかでかあさん裏切れない自分もいて。そしたら全部失った。失ったら・・・・何よりも明日香を失ったことが一番ツラいことに気づいた。」

「あたし、逃げたの。啓輔からも自分からも。あたしがいなきゃ、おばちゃんも、啓輔も困惑しないで済むって。良い方に行くって、言い聞かせて。日本に帰ってきて、ブラウン管に啓輔の姿がなかったとき、あぁ駄目だったんだって思った。結局誰も幸せになれなかったんだって・・・・」

「これから幸せになれるよ。」
「啓輔・・・」
「一緒にいよう。」
明日香は首を横に振った。
「あたし・・・そんな資格ないよ。」
「明日香？」
「あたし、サイテー人間なんだ。啓輔裏切るようなことしたの。寂しさを埋めようとして・・・」
啓輔は明日香の口をふさいだ。
「もう、いいんだ。」
「啓輔・・・？」
「俺がいけないんだから。」
知ってる？
あの日、啓輔は空港から戻って、明日香の家に行った。
明日香の母に事情を聞きたくて。
その帰り、大地に引止められ突然謝られた。
「すまん！俺、明日香のグラついてる気持ちに付け込んで、明日香を抱いたんだ。明日香は責任感じて俺らから離れる決心したんだと思う・・・だからもう、戻ってこない気がするって思ったんだ。すまなかった。殴ってくれてもいい。だから、明日香を嫌いにならないでくれ。」

啓輔は大地の胸ぐらを掴んだ。
でも、殴れなかった。
大地が明日香を想ってることも、こうなったのも自分のせいだということもわかっていたから。

「俺こそ・・・すみませんでした。俺さえいなければ、明日香は大地さんと幸せになれたんだ。俺は、自分のことしか考えてなかった。明日香も仕事も両方ほしかった。」
「これからだよ。」
「え？」
「これから明日香を幸せにしてやればいいんだよ。掴まえたら今度は絶対離すなよ。」
「大地さん・・・」
「明日香をよろしくな。」
「はい！」

「もういいんだ・・・明日香がいてくれれば。」
「あたし・・・あっちには戻らないよ。」
「いいよ。俺がこっちに来る。」
「本気？」
「うん。だから、もうどこにも行くなよ。」
「うん。」

もう、僕達に境界線はない・・・

啓輔は、カバンから指輪を出した。

「結婚・・・しない？」

明日香は少し微笑んだ。
「いいよ。」

数ヵ月後。

「オラーイ、オラーイ」

啓輔の荷物を積んだトラックが、二人の新居に到着した。

「啓輔・・・荷物多すぎ。」
「そうか？お手伝いさん呼んでるんだ。」
「こんなとこまで？」
「喜んで来たぞ。」

遅れてワゴン車が入ってきた。
運転席から出てきたのは、

「よぉ！明日香。」

大地だった。

「大地っ！」
「おぅ！」

大地は両手を広げて駆け出す明日香を抱きとめた。

「元気してた？」

「お前こそ。痩せたんじゃないのか？」
「結婚したって。」
「そう！お前は啓輔くんに取られたからよ。代わりをな。」
「ひどっ。いいつけてやるぞ。」
「それはちょっと・・・」
「あのぉ・・・感動の再会はこの辺で、そろそろ離れてもらえませんか？」

抱き合ったままの明日香と大地は慌てて離れた。
明日香はこうしてまた大地とバカやれるとは思ってもいなかった。
とんだ啓輔のプレゼントだった。

啓輔は、明日香の喜ぶ顔が見たかった。
この二人は無二の親友なんだ。
恋愛感情を超えた、愛情とキズナがある。
大地は明日香の一番の理解者であり応援団長である。
だから、この二人を再会させてやりたかった。

「みんなぁ、引越しそばだよぉ～！」
「いまどきあんの？」
「久しぶりに聞いた、引越しそば！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1440f/

未定

2010年10月23日10時50分発行